



## まるちが ちょうじもん

この紋に描かれる丁子は、クローブと呼ばれる香辛料で、花の薑<sup>つぼみ</sup>を乾かして作られたものです。かつては薬用として熱を鎮めたり、香料として薰物や飲料に用いられ、また防腐作用から食材の保存にも重宝されました。産地は遠く東南アジアのモルッカ諸島に限られており、大変貴重な品として国際貿易の要に据えられていました。日本では朝廷や幕府が厳格に管理し、長崎・博多・下関・神戸・鹿児島といつた海外交易の拠点にのみ荷揚げが許されました。そのため、この家紋を持つ家々は、古くから交易や外交に関わった家系に多く見られます。

代表的な例としては、公家の押小路家、徳川親藩として長崎を治めた形原松平家、さらには清和源氏の流れを汲み常陸国を支配した佐竹氏などが知られています。佐竹氏は文化人を多く輩出し、特に香の道に通じ、京都との交流を深めたことで、丁子と縁の深い文化的背景を持ちました。室町幕府の時代には将軍家に参内し、京で風流を学び、また都の文化人を国元へ招いて独自の文化を築き上げています。

また、「丸に違ひ丁子紋」は芸能の場でもしばしば目にすることができます。特に歌舞伎の舞台衣装に描かれることが多く、『太刀盗人』『連獅子』といった演目の際に、舞台衣装として現れます。

異国から伝わった香辛料が家紋として日本文化に取り込まれ、それがさらに芸能の世界でも意匠として息づいている点は、まさに交易・外交・文化の結びつきを象徴しているといえるでしょう。

## 丁子の効能と歴史的意義

丁子はモルツカ諸島を原産とする常緑樹の薔を乾燥させたもので、その芳香と効能ゆえに、古来より東西交易の要をなした香料のひとつである。我が国においても、公家・武家・庶民の間で広く用いられ、その存在は単なる香料を超えて、文化と信仰を映すものであった。

### 一 武士の生活における効能

戦国の世より幕末に至るまで、武士は出陣に際して兜や衣に丁子の香を焚き込み、邪気を祓い、心を鎮めたと伝えられる。香は身だしなみであると同時に、魔除けの象徴でもあった。また、刀剣の手入れに用いられた「丁子油」は、揮発性の精油を椿油に溶かしたもので、防錆と洗浄に優れ、しかも人体に無害であった<sup>2</sup>。その芳香に包まれて刀を磨く姿は、武士の静謐な心を映すものとされ、千年以上を経てなお伝わる刀剣保存の伝統を担っている。

#### 精神面・儀礼

鎮静作用 .. 刀の手入れの際に心を鎮める

邪氣祓い .. 兜や身に香を焚き込み、戦場で魔除けとした

身だしなみ .. 髪付油や香料として使用し、出陣の装いに品格を添える

#### 武具の手入れ

防錆効果 .. 椿油と混ぜた「丁子油」による刀剣・武具の錆止め

洗浄効果 .. 刀の刃を清める働き

無害性 .. 人体に害が少なく、安全に扱える油

#### 二 一般生活・医療における効能

丁子の効能はまた、広く人々の生活と医療に及んでいた。平安期には薬玉（くすだま）や衣被香に調合され、邪気を祓い、防虫の役割を果たした<sup>3</sup>。染色の煮汁として用いられ、また髪付油に混ぜられて髪を整えるなど、日常の中にも息づいていた。医療においては、鎮静・鎮痙・抗炎症の作用を持ち、とりわけ歯痛を軽減する効能が知られていた。『医心方』（10世紀、丹波康頼著）にも丁子の名が記され、唐より伝わった芳香薬の処方に用いられている<sup>4</sup>。後世には歯科用チンキ、さらに現代の「今治水」にもその成分が受け継がれている。

#### 医療・生薬

鎮痛作用 .. 歯痛を和らげる（現代では今治水に配合）

鎮静・鎮痙・抗炎症作用 .. 心身を落ち着け、炎症やけいれんを抑える

防腐作用 .. 腐敗を防ぎ、薬用に利用

口臭予防 .. 古代中国宮廷で使用された例あり

#### 香料・生活文化

香りによる邪氣祓い .. 平安の薬玉・衣被香などに利用

防虫 .. 衣服に香料を包み込んで虫除けに

染料 .. 煮汁を染め物に利用

芳香文化 .. 「源氏物語」にも登場、生活を香りで彩る

#### 食用・嗜好品

香辛料 .. 肉料理や菓子の風味づけに用いられる

嗜好品 .. インドネシアでは「クレテック煙草」に配合

#### 結び

かくして丁子は、武士にとっては、「心を鎮め、邪を祓い、刀を守るもの」

庶民にとっては、「医薬と香料を兼ね、生活を豊かにするもの」

として、時代と階層を越えて人々に寄り添ってきた。その香りと効能の一滴は、まさに千年をつなぐ歴史と文化の証左にほかならない。

#### 脚注・典拠

1. 『源氏物語』、薬玉に丁香を調合する記述あり。
2. 岡村瑞穂、寛永年間にオランダ人より精油抽出法を学び、「丁子油」を製した記録。
3. 正倉院宝物「帳外薬物」に丁香の名見ゆ。
4. 『医心方』(984年、丹波康頼編纂)に芳香薬の処方として記載。
5. 『漢官儀』(後漢期)、尚書郎が挙謁時に丁子を口に含んだとの記録。